

# 語りベシアター2023 ガスビルを設計した

## 建築家・安井武雄

公演開催報告と制作裏話

栗本智代

Kurimoto Tomoyo



地域の歴史や文化をストーリー仕立てにして、語り(朗読)と映像、そして音楽の生演奏などを交えた独自の演出で紹介する「語りベシアター」。今回は、「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2023」という日本最大級の建築イベントのなかで開催した公演について報告する。

「くりもと・ともよ」

大阪ガスネットワーク(株)エネルギー文化研究所研究員。1988年大阪ガス(株)入社。商品開発部を経て、1991年より現職。まちの個性や本質を歴史・文化的側面から探究し、「ストーリー」による都市魅力の発掘・創造に取り組む。独自の手法による「語りベシアター」は、自治体の主催事業や民間の勉強会などでも展開。一方で、フィールドワークやインタビューを中心とした執筆も行う。

### イケフェス大阪2023の公式プログラムとして実施

大阪では毎年秋に、「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」(通称、イケフェス大阪)が開催されている。イケフェス大阪は、大阪のまちをひとつの大きなミュージアムと捉え、そこに存在する「生きた建築」を通して見えてくる、多様で豊かな都市の物語

性を大阪の新しい魅力として創造・発信しようとする取り組みである。2013年度から実証実験を経て立ち上がり、日本最大級の建築イベントとなった。2023年は10回目として、10月28日、29日に開催された。[\*1]

2022年の同イベント開催時には、連携プログラムとして「語りベシアター」も参画し、「御堂筋」をテーマにした作品を上演した。非常に好評で、来場者の過半

大阪の片岡建築事務所へ入所する。大学在学中から非常に優秀で、既存の様式をそのまま取り入れることを嫌い、就職後、独自の境地から生まれたデザインが評判を呼んだ。

片岡建築事務所在職時、北船場の「大阪倶楽部(2代目)」[\*2]の設計を担当し、それが本格的な大阪デビューとなる。「南欧風の様式に東洋風の手法を加味せるもの」と自身で表現しているが、どのような様式にもおさまらないオリジナルデザインを創出した。そして同年に独立、安井建築設計事務所を立ち上げる。

幸いにもその仕事ぶりを新進鋭の実業家、野村徳七が高く評価し、彼の指名や紹介で、野村證券や野村銀行、高麗橋野村ビルディングほか多数を設計。自身が手が



安井武雄肖像。所蔵/安井建築設計事務所

けた作品の様式を繰り返すことはなく、その土地でしか表現できない建築を追求し、安井は苦悩と模索を続けてきたという。そして、1933(昭和8)年、ガスビルを完成させる。

施主である大阪ガス株式会社の第3代社長で初代会長である片岡直方なおむねには、本社ビルを「ビジネスセンターであると同時に市民に親しまれる、地区発展のシンボルにしたい」という思いがあった。その要望を汲み取り新たに出現した建造物は、緩やかで独特な曲線、白いタイル張り、黒い御影石の対比など、まるで豪華客船が舞い降りたかのような印象を人々に与え、「白哲の巨人」と形容された。安井は「ガスビルは、使用目的および構造における自由様式である」と宣言している。

1955(昭和30)年、安井武雄の逝去後も、安井建築設計事務所は継続し、1966(昭和41)年、大阪ガスビル新館(北館)の増築には、安井の娘婿にあたる建築家・佐野正一が携わった。「北館を増設してなお、一体として安井武雄の理想を継承したい」という

数は「語りベシアター」を初めて体験されたという方であったため、新しいお客さまの開拓にも絶好の機会となった。そのため、2023年も引き続き参画したいと考え、「大阪ガスビルディング」(以下、ガスビル)の建物公開展示の一環で、公式プログラムとして位置づけしてもらおうと同時に、作品テーマも、イケフェス大阪を意識した題材を新たに掘り起こすことにした。それが、ガスビルを設計した「安井武雄」という建築家に焦点を当てた物語である。

「ガスビル」は、Daisoグループの自社ビルだが、建築について専門の勉強をしておかなかった筆者でも、入社時から、その外観や1階のエレベーターホールホールの雰囲気雰囲気で何となく「モダンな建物だなあ」と感じていた。だが、具体的に、どんなセンスを持つ建築家かどのような思いで設計したのか、なぜ高い評価を得ているのかなど、ほとんど知る機会がなく、いつか調べたいと思っていた。また社員はもちろん多くの方にわかりやすく周知すべきだと思った。

安井の作品は、大阪市内で北船

難題を一手に背負って実施された増築は、南館北館あわせて一体の統一感を最優先させることで、往時の輝きを失わないどころかそれ以上に良くなったと、高い評価を受けた。ガスビルは今日まで活用され、8階のガスビル食堂は、創業時の雰囲気やメニューを大切に守りながら営業を続けている。

### なぜ、高い評価を受けているのか

安井武雄やその作品が、なぜ高く評価されているのか、そして「自由様式」とは何か? その答えは調査の途上ではまだ漠然としていた。そこで、建築史を専門とする大阪公立大学の倉方俊輔教授を訪ねると、このような話をしてくれた。

「戦前、設計という仕事を独立したものとして対価を払う文化がない大阪で、個人の名前と力量で活躍した設計者は、渡辺節と安井武雄の二人だといえる。渡辺節が、様式を駆使して社会的妥当性、社会の共通理解を得て評価されたのに対し、安井武雄はそれをせずに

場に3棟現存しており、その作風をたどるだけでも、見えてくるものがあるに違いないと、調査を進めた。また、安井のまとまった資料文献は数多くはないが、『自由様式への道 建築家安井武雄伝』(山口廣著、1984年発行)という1冊に、かなり詳細に記されている。さらに、安井が立ち上げ現在も続いている安井建築設計事務所から、史実の確認や資料提供など、全面的な協力を依頼し、サポートしてもらったことになったのは大変心強いことであった。

### 安井武雄の歩みと作品

では、建築家・安井武雄とは、どのような人物だったのだろうか。その歩みや人となりを簡単に紹介しよう。

1884(明治17)年、千葉で軍人の家に生まれるが、高等学校時代に絵画やデザインに興味を持ち、東京帝国大学工科大学建築学科に進む。卒業後、中国大陸に渡り南満洲鉄道株式会社での10年間の勤務を経て、1919(大正8)年、

社会に認めさせてきた。土地性を顕在化させるのが建築だが、『ひとつの様式におさまらない折衷様式』と『素材を活かす』ことに秀逸で、特にガスビルはその塩梅が絶妙な大建築だといえる。大阪倶楽部(2代目)からガスビルまでたった9年でこれだけ作風を転換したのはありえないことである。もちろん大阪倶楽部も竣工当時非常に斬新であったと思われるが、ガスビルという作品で、それまでの思いを形として完成させたのだらう。様式や素材以外の点でも、使い手や歩行者ともコミュニケーションをとれる設計がされ



竣工時(1933年)の大阪ガスビルディング。所蔵/大阪ガス(株)



現在も使用されている、安井武雄設計の作品。上/大阪倶楽部(2代目) 中/高麗橋野村ビルディング 下/大阪ガスビルディング

ており、後の増築を含め、望まれた機能や役割を果たし続けている。まさに生きた建築として、今も安井武雄が語りかけてくるような名作である」

倉方先生の話で、ようやく建築家としての安井武雄のポジションや作品の本当の魅力がわかりはじめた。天性の才能と自信、そしてこれまでの様式にとられない頑固なこだわりにより、若い頃から満洲の荒野に大きな建物を創ることに成功し、またその経験を活かして伸び盛りの大阪で、あえて評

価軸のない、自身で「自由」と表現するオリジナリティを進化させ、社会的評価を得て確立させた、というところに、彼の凄さがあるのだと理解した。また、安井武雄の精神を受け継ぐ思いで増築を試みた佐野正一の覚悟と、南館北館の新旧が一体となっている現在の外観に改めて魅せられた。

### 「語りベシアター」としての作品づくり

お客さまがより理解しやすいよ

な。自由な発想と最先端の技術。おおいに楽しみにしているぞ」

当日は、2回公演を開催。公式ガイドブックやホームページ、チラシでの案内では公演のイメージがなかなか伝わらないのが悩みであったが、合計約200人近くの来場者があり、初めてという方が過半数だった。アンケートでは「初めて見たが、想像していたよりずっと良かった」「何となく気に入ったので足を運んだ。本当に良かった」「安井武雄やガスのビル解説がわかりやすかった」

う、前述の話を主軸に、さまざま

なエピソードや資料、描き起こしのイラストを交えて、電気紙芝居的にわかりやすくパワーポイント画面と台本を制作した。イラストについては、以前より何回か依頼してきたイラストレーターのチャッキー松本氏に、筆者が描いた下絵イメージをもとに彼独特のタッチで作画してもらった。音楽づくりについては、語りベシアターの立ち上げ当初からお世話になっているピアノの宮川真由美氏、ヴァイオリンの西村恵一氏にくわえ、

「語りと音楽とお芝居のコラボレーションが素晴らしい」「イケフェスに適したプログラムだと思った」「他の作品もまた見てみたい」「未来のガスビルが楽しみだ」など、高く評価いただけた。ガスビルの中で上演できたことも効果的であった。

制作過程で、内容をすべて確認してくれた安井建築設計事務所取締役社長の佐野吉彦氏が、公演をご覧になり、「知っていることから、何か所も胸にぐつと来るシーンがあり、感動しました」と

尺八奏者の饗庭凱山氏に参画して

もらった。饗庭氏は初めての共演であったが、開口一番「今回のテーマは、まさに僕が日ごろ目指している、和と洋の融合に通じるところがあり、非常に共感できる」と話しており、音楽的にも和洋折衷の、まさに安井武雄のテーマにふさわしいコラボが実現した。さらに安井武雄という建築家に親近感を持ってもらうため、役者の石原正一氏に安井武雄を演じてもらった。関連資料の記載より、安井は非常に真面目で仲間とお酒を酌み交わすことも声を荒げるこ

とも比較的少ない、わが道を行くストイックな人だと理解していた。ただ表には出さなくても、熱情や葛藤、達成の喜びなどは、心中では激しく自問自答が繰り返されているのだろうと考え、モノログとして台本を構成した。

一方、役者の石原氏は、いかにも関西人らしい柔軟で明るい雰囲気の方で安井と逆のキャラクターだと感じたので「大阪弁はやめていただき、極力クールな感じでお願いたします」とリクエストして、役作りを仕上げてもらった。

感想をおっしゃったのも、大変嬉しく光栄であった。

2024年は、大阪倶楽部(2代目)の創立100周年であり、安井建築設計事務所も同じく創立100周年を迎える。アニバーサリーに向けこの作品も、よりブラッシュアップして再演を計画したいと考えている。

注  
\*1 生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪 20th <https://kenchiku.jp/kefes2023/>  
\*2 1914(大正3)年に竣工した初代の大阪倶楽部は、1922(大正11)年、火災で焼失している。



語りと映像、音楽の生演奏にくわえ、演劇がコラボした公演の様



安井武雄役のモノログシーン



ピアノとヴァイオリン、尺八による、和洋折衷の音楽的演出で、安井武雄の作風ともリンクさせた。



タイミングを計りつつ、手元で画面を進めながら「語り」を行う筆者。